

鬼餅由来 鬼の家の便所

梗概

ほら、これは兄が、シマ中の人食い鬼になって、妹は別の村に嫁いで行って暮していたが、「本当に、私の兄が、みんな、人を食べるのかな。」と思って、乳飲み子を連れて、そのシマに帰ってくると、もうシマはだれもいない。親達もみんな食べられてしまった。(そして) 鍋を開けると、鍋には、人の手などが切りきざまれて煮られていて、びっくりした。それで、「兄さん何をしているんですか。」というとな、この妹はウターという名だったとか。名前はウターだったそうだよ。「ウター、きてくれたのか。よくきてくれたな。」と、もう妹を食べようとよろこんでいた。それで妹は、「これは考えて、どうしてもここから逃げないといけないが。」と思って、チグの実を取ってきて、兄の頭に置いて、「どれ兄さん、シラミを取ってあげよう。」という、「うん、取ってくれ。」といった。(妹は) シラミのかわりに、チグの実をパチパチさせた。そして、自分の背負っている子どもをつねって泣かせた。「どうして、そんなに子どもは泣くのか。」「糞をしたくて泣いているんですよ。」「それなら、させてきなさい。だけど、おまえの手はくくっておこう。」といって、手に縄をつけてトイレに行かせた。それで、(妹は縄を) 別のものにくくって、すぐに逃げて行った。すると、(兄が) ウターと呼ぶと、ヘーイといったらしいよ。兄がウターと呼ぶと、ヘーイというのは、それは神だったはずだ。ヘーイと、いったらしいよ。それで、「こんなに長い間糞をするなあ。」と思って、(兄が) 見に行ってみるといなかった。(妹は) 逃げて行って、浜の方までくると追いつかれそうになったので、「すぐにここに来るので。」と、伝馬舟がそこにいっぱいあったので、それをひっくり返してその下に隠れた。すると、親からも神からも守られたわけさ。その兄は、「ウターも、乳飲み子も食べそこなったな。」といって、ちょっと伝馬舟の上を歩いていたが、(妹は) 運が強かったので開けられずに、それで助かった。兄はもう、「食べそこねた。」といって家に帰って行ったらしいよ。

そして、(妹も) 家に帰って行って、「これはもう、ぜひ、私が殺さなければ、話もできないので。」といって、十二月八日、餅の日ね、ちょうど(その日に) 自分の物は本物の餅、兄の物は石などを混ぜて作り、(兄の所へ行き)「さあ、今日は餅の日だから、山に行って餅を食べてこよう、兄さん。」という、「よし。」といって、どうせ妹も食べられるのでと思っているので、「ここは空気もいいし、さあ、ここで食べようね。」という、「ああ。」と、妹のいうのはなんでも聞いた。そして、崖を後ろにして兄を座らせて、「それだけは兄さんの

もの、これだけは私のもの。」といって、餅を食べながら、下の方を開いた。すると、(兄は)「おいウター、それは何だ。」という、「ここは餅を食べる口、そこは鬼を食べる口。」といいながら、兄の前でそこを開いてみせたら、(兄は)恐くなって、自分で崖の方にしりごみして行って、すぐ崖にポンと落ちたのでね、その時に石で殺した。上から下に石を落して、そして、無事助かった。それで、十二月八日は、　ホーハイムーチーといって、　ムーチーガーサーもそこに飾るでしょう。そして、その餅を煮た汁をひっかけるでしょう。鬼が立つことができないようにね。そんな話だったか、何かそんな話を聞いたよ。

話者情報	1915（大正 4）年生まれ　女性
記録日	1982 年 9 月 22 日
分類	本格昔話、民俗